

米軍チャプレンの研究

—構造分析と主観的視点—

田 中 雅 一
(京都大学人文科学研究所)

はじめに

本論文の目的は、アメリカ合衆国の軍隊に属するミリタリー・チャプレン military chaplain、あるいはたんにチャプレンと呼ばれる聖職者（従軍牧師あるいは従軍司祭）の性格について考察することである。その際、かれらの境界的性格（後述）あるいは矛盾が、かれら自身によってどのように理解され、克服されようとしているのかに注目する。

『カトリック事典』は、チャプレン chaplain に団体司祭という訳を当て、つぎのように説明している。

具体的には礼拝堂または記念堂付司祭、あるいは修道院、孤児院、病院、刑務所等の施設で聖務を行うために任命された司祭、特定の階層の人々のために奉仕するために任命された司祭（例えば従軍司祭）、その他各種信心会の集会や議会等の集団で祈りの先唱をする司祭もチャプレンと呼ばれる。…生活の事情により主任司祭の通常の司牧を受けることができない人々、すなわち移住者、亡命者、難民、放浪者および船員のために可能なかぎり団体付司祭が任命されなければならないとされる⁽¹⁾。

これはカトリックの定義であるが、プロテスタントについても基本は同じであろう。チャプレンは、団体や非定住集団に携わる司祭であり、具体的には、軍隊、病院、学校、刑務所などで働く聖職者である。

チャプレンという言葉の由来に関しては、以下のような伝承がある。

4世紀のことである。異教徒のローマ人兵士が、ある冬の夜寒さでふるえている乞食に出会った。かれは外套を脱いでそれを剣で半分にさいて、半分を乞食に与えた。その夜彼はキリストが自分の外套を着ている夢を見る。この体験がきっかけで彼は洗礼を受けキリスト教徒になった。後には軍隊を離れて教会に身を捧げることになる。そのうち、彼はフランク王国の王たちの守護聖人マルティヌスとなった。彼の外套 (*cappa*) は神の現前を示す旗として戦いで使用された。しかし、この外套は教会の聖なる遺物であるから、これに司祭が管理人として同伴した。外套を保管する司祭がカペラヌス *capellanus* となった。彼はまた王たちのためにミサを行った。

ここにチャプレンという言葉が由来し、外套の安置場所 (*capella*) からチャペル (礼拝堂) という言葉が生まれたのである。この話から、チャプレンとはなによりも従軍司祭を意味することが明らかである。病院や監獄、学校のチャプレンは、これから派生した言葉である。以下では、ことわりのないかぎり、従軍司祭のことをチャプレンという言葉で記述していきたい。

チャプレンは、キリスト教的な伝統に由来するため、日本人にはあまり馴染みのない概念である。また、日本における政教分離の概念、すなわち公的な空間から宗教色をなくすという政教分離の理解に基づくかぎり、このようなチャプレンの存在は憲法違反であり、前近代的性格なものといえる。宗教の役割が減少し、またうさんくさいとみなされがちな現代日本においてチャプレンへの理解があるとは思われない。しかし、チャプレンの主たる目的、すなわち兵士の宗教的な要求にこたえるためという本来の設置理由を考慮するなら、頭から否定すべきものではなからう。筆者は、本稿では軍隊における宗教のあり方を考察することで軍隊と社会との関係の理解に貢献したいと思う。

1 米軍におけるチャプレン制度の歴史⁽²⁾

アメリカ合衆国の軍隊の歴史に限ると、北米では17世紀から民兵に聖職者が参加、ともに闘うということが生じていた。

1775年、独立戦争勃発の年に、正式にチャプレンが陸軍で認可された。これが合衆国でのチャプレン制度 (*chaplancy*) の起源とされる。陸軍より遅く発足した海軍では1778年に最初のチャプレンが任命された。これによって、任命さ

れたチャプレンは軍から給料を受け取ることができるようになる。ちなみに、空軍は1949年に設置された。また海兵隊と沿岸警備隊は、海軍からチャプレンが派遣されていた。

1775年から戦争終結時の1783年にかけておよそ230名がチャプレンとして活躍した。しかし、平時になると、兵士の数も減り、チャプレンの数も数名となる。

記録によると、1813年から1856年までの間、80名のチャプレンがいたが、その内訳をみると、ほとんど長老派プロテスタントで、カトリックは3名にすぎない。このような数字から、アメリカ合衆国がなによりもプロテスタントの国であることが理解できる。

1838年には基地付けのチャプレン (post chaplain) が生まれた。それまでは連隊や旅団ごとにチャプレンが任命されていた。基地付けのチャプレンはまた学校の教師でもあった。

1861年に勃発する南北戦争をきっかけに、3000名のチャプレンが連邦軍に参加し、66名が戦死している。南部連合軍の記録は定かではないが、およそ600から1000名が参加し、25名死亡している。

戦争勃発時の1861年にユダヤ教徒のチャプレンが生まれた。その2年後の1863年には、African Methodist Episcopal Churchに属していた黒人（アフリカ系アメリカ人）と先住民出身のキリスト教チャプレンが誕生した。後者はチェロキーの首長の息子（キリスト教徒）であった。黒人についていえば、158の黒人連隊が組織されるが、そのうち12連隊に黒人のチャプレンが配属されていた。また南北戦争時にチャプレンの軍服が制定された。

戦争が終わって平時になるとチャプレンの数は34名に減る。当時の階級は大尉 (Captain) であったが、階級章は付けなかった。

1880年には、チャプレンには大卒 (Bachelor of Arts か Bachelor of Divinity) であることが資格として求められることになった。

1899年には襟章として十字架を付けることになった⁽³⁾。さらに、このころからチャプレンの任命には、教派の承認 (ecclesiastical endorsement) が必要となった。

1914年には十字架だけでなく階級章を付けることになる。

第一次世界大戦直後の統計によると、368万5千人の兵士に対して、およそ

2200名のチャプレンが奉仕した。このうち、22名が戦死した。平時になると、数が激減して125名となる。1917年には海軍が、20年には陸軍が、軍ごとにチャプレンをまとめるChief of Chaplainsが設立する。ちなみに彼は大佐の階級を与えられていた。同年チャプレンを養成する学校が設立された。

第二次世界大戦直前はチャプレンの数は17名だったのが、戦中は8900名にふくれあがる。終戦直後は8191名だった。カトリックが2278名、プロテスタントが5620名だった。白人のチャプレン(カトリックとプロテスタント)のほか、黒人チャプレン250名、ラビ311名、また、少数だがギリシャ正教会のチャプレンがいた。日系部隊には仏教徒のチャプレンを派遣することが認められたが、実際にはキリスト教徒のチャプレンが任命されている。第二次世界大戦中にチャプレンは478名戦死している。ちなみに、この戦死者数は、部隊ごとに考えると、歩兵と航空隊について3番目に多い。

朝鮮戦争時には、およそ1500名のチャプレンが従軍している。

ベトナム戦争批判とともにチャプレン(制度)への批判も高まる。宗教団体の中にもこれを批判するものがあらわれた。戦争屋warmongerと呼ばれ、蔑まれることになった。そして、良心的兵役拒否や薬物中毒などを扱う必要が生まれた。なおベトナムには300名のチャプレンが参加し、13名が死亡している。

ベトナム戦争が終結し、1973年に徴兵制度が撤廃される。その一年後の1974年にははじめての女性チャプレンが誕生している。

1987年には仏教のチャプレンを仏教団体が承認する手続きも認められた。

最近では、社会主義国家の崩壊後、キリスト教が復活し、ロシアやポーランドの軍隊にもチャプレン制度が導入されることになった。これにあたって、米軍からチャプレンが派遣されて、協力にあたった。

イスラームのチャプレンは1993年に導入され、2004年現在およそ4000人の米軍イスラーム兵士にたいし17名のチャプレンが活動している。

チャプレンの歴史はその専門化の歴史である。すなわち、かれらは戦時のときに一時的に参加する聖職者から、宗教団体の認可を受けて、軍に直属する聖職者へと変貌していく。

南北戦争当時は、識字学校の教師、郵便局長、代筆屋、金貸しなどの雑用もしていたが、時代を下るにつれて本来すべき聖職者の仕事に専念することがで

きるようになった。チャプレンの階級は士官 (officer) であり、そのための学校が整備される。その資格認定に当たってチャプレン候補者の所属する団体の推薦が必要となった。また第二次大戦後になると、学士から修士 (3年) へと、その教育資格も高くなった。また、チャプレンになる前に2年以上の教会での聖職者としての経験が必要である。そして、従軍することが決まると、軍隊が用意している2ヶ月のコースに入る。

チャプレンは、軍隊においては医師や弁護士など、専門的知識が問われる士官であり、かれらをまとめてスタッフ・オフィサーという。これは、軍隊の指揮系統に直接関わるライン・オフィサーと対比される言葉である。

もうひとつ注目すべきことがらは、チャプレンの歴史が、そのまま米国がマイノリティ集団の軍への参入を認めていく歴史として読めることである。白人から黒人、先住民、あるいは日系アメリカ人など、チャプレン制度の歴史から、軍人の構成民族の変化も推察できるのである。チャプレン制度の歴史は、限界はあるが、さまざまな民族集団 (エスニック・グループ)、宗教信者から成る軍隊の要求に応じていこうとする歴史でもあった。それは、プロテスタント国家から多宗教国家への変貌に対応していた。

女性チャプレンの誕生の背景に一般社会での男女雇用均等への動きが認められる。当然教会側の意識も変化した。軍隊は、1973年の徴兵制度の廃止によって激減する兵士の数を補完するために、既婚男性や女性を募集する必要があった。既婚男性には妻や子供がいる。軍隊が「女性化」することになったのである。こうした背景のもとで、1974年に女性のチャプレンが生まれたと推察できる。

II チャプレンの境界的性格

以下では、チャプレンの境界的あるいは越境的な性格について述べておきたい⁽⁴⁾。ここでいう境界(越境)的性格とは、本質的に対立するふたつの領域のどちらにも属する、あるいはどちらにも属さないような、どっちつかずの性格を指す。

まずチャプレンは聖職者であり、特定の宗教団体 (デノミネーション) の認可を必要とするが同時に軍隊の組織の一部を担う。かれ・彼女は、本来分離すべきとされる、国家すなわち軍隊と宗教の境界上に位置する。それは、国家＝

世俗と宗教＝聖、あるいは国家＝公と宗教＝私という対立の境界に位置することも解釈できる。さらに、軍隊が象徴する暴力と、宗教とくにキリスト教が強調するような愛や平和との対比においてもまた、矛盾に満ちた存在ともいえる。

チャプレンは、軍人として階級をもっている。しかし、一方でかれらは弁護士や医師などと同じ専門職能者で、軍隊ならびに兵士に専門的知識を提供する存在である。チャプレンの場合は宗教的知識に基づいて、司令官に進言し、また兵士たちの相談にのったり、儀礼を執行したりする。

士官は、基本的には大卒あるいは士官学校などですでに高度な軍事教育を受けている。これに対し、下士官兵は、高卒あるいはそれ以下の学歴で、数年ごとに契約を更新しなければならない。米軍では、士官と下士官兵は仕事以外でのつきあいはきびしく禁じられている。両者はともに独立した10の階級からなり、下士官兵から士官に階級が上がるということは原則としてありえない。ところが、スタッフ・オフィサーたちはこうした厳格な上下関係から自由である。とくにチャプレンは、日常的に兵卒と交流し、相談相手となり、必要なら告解を受ける。チャプレンは、士官・下士官兵という境界上にあると解釈できるのである。これは、チャプレンたちが、たんに宗教上の活動だけではなく、より一般的なカウンセリングを実践してきたことと密接に関係している。

宗教についていえば、軍隊における宗教職能者の役割は、多くの兵士たちの宗教的な要望にこたえるためだが、多宗教的な文脈においては、兵士ひとりひとりの宗教的要求に応じることは物理的に不可能である。複数のチャプレンが常駐する基地や大型艦船では、一般にプロテスタント4、カトリック1の割合で配備されている。しかし、部隊つきのチャプレンは原則ひとりである。おおよそ12000人にひとりといわれている。この場合、チャプレンの宗教あるいは教派(デノミネーション)に関係なく、兵士と接する必要が生じる。たとえば、プロテスタントのチャプレンがカトリックやギリシャ正教に属する兵士に儀礼を施す。場合によっては相手がイスラームなど非キリスト教徒の兵士である可能性もある⁽⁵⁾。

複数のチャプレンが存在する場合、宗教や教派に関係なくかれらはさまざまな局面で協力をしていく必要がある。こうした状況は一般社会においては生じない。聖職者が日常的に付き合うのは同じ宗教・教派に属する聖職者であり、また教会に集まるのも同じ宗教・教派の信徒だからである。宗教の領域におい

でも、チャプレンは境界的存在といえよう。

チャプレンは、かれらが属する部隊とともに戦場に赴く。しかし、かれらは武器を携行してはいけない。その意味で、チャプレンは兵士であって兵士ではないといえる。かれは敵から見れば本当の敵とはいえない。敵と味方の境界上に位置すると解釈できるのではないだろうか。戦場で武器を持たないということは、味方の兵士から見れば攻撃性が欠けている、あるいは剥奪されている男性である。かれは、兵士に比べると、真の男性とはいえない。戦場において真の男性とは、武器を持って果敢に敵に戦闘を挑む攻撃的な兵士である。武器を携行せず、戦闘そのものを放棄しているようなチャプレンは男性とはいえないのである。このような視点から見ると、チャプレンはジェンダーの境界上にいると解釈できよう。

以上のように、チャプレンは、政治と宗教、暴力と平和、死と愛といった対立において、軍隊内での対立において、また多宗教的な状況において、さらには男性（兵士）と女性（非兵士）、敵と味方という対立において境界状態に位置する。もちろん、現実においてはベトナム戦争時のように武器の携行をせざるをえなかったり、戦闘地帯で中立を維持することができなかったりする。それは、特定の国家の軍隊に従属するチャプレンの限界を示唆しているともいえる。

チャプレンの以上のような境界的性格を外から見た客観的な構造分析の結果として位置づけたい。本稿では、こうした境界的性格をチャプレンたち自身がいかに関心しているのかを考えてみたい。この境界性は、チャプレンの直面している矛盾ともいえるから、問題は、かれらが矛盾をどのように解釈し、克服・解決しようとしているのか、と問い換えることも可能であろう。

III チャプレンの活動

チャプレンの活動は、宗教に関わるものが主である。まず礼拝（ミサ、サービス）が挙げられる⁽⁶⁾。これは、基地や戦場においても定期的になされる。人生儀礼といえる結婚、洗礼、葬式、埋葬などの執行、また日常的なカウンセリングや告解、さらに病人や負傷者の見舞いなどがある。カウンセリングは、宗教的なことがらにかぎらず、厭戦や、さらには家族のことなど一般的な悩みなどにおよぶ⁽⁷⁾。

以下に筆者が観察した在日米軍基地での事例をいくつか紹介しておきたい。

基地でのチャプレンの活動の場所は礼拝堂であり、そのオフィスも礼拝堂に付随している。日本の主要な在日米軍基地にはすくなくとも一つ礼拝堂があり、その施設をキリスト教各教派、ユダヤ、イスラーム、バハイなどが利用する。またアフリカ系アメリカ人、韓国人、フィリピン人などのエスニック集団に応じて多様な行事が行われることもある。

キリスト教はさまざまな教派からなり、またチャプレンたちも特定の教派に属するが、チャペルでの儀礼は大きくカトリック、プロテスタント一般、ルーテル派などに分かれているにすぎない。各サービスあるいはミサはおよそ1時間半で交代する。さらにゴスペルを中心とするアフリカ系アメリカ人の礼拝や福音派系の礼拝も定期的に行われている。沖縄の嘉手納基地では東方正教会が、カトリックやプロテスタントが使うのとは異なる、イコンが数多く飾ってある礼拝堂を使用していた。また、普天間にはイスラーム兵のためのモスクもある。

ここで横須賀のチャペルの割り当てを紹介したい。横須賀にはチャペル・オブ・ホープという大きな礼拝堂がある。礼拝堂には、艦船の旗が飾られている。横須賀から出航中の艦船には黄色の布が付けられていて、無事の帰還を祈っていることが暗に示されている。教派ごとに見ていくと、プロテスタント(諸派)は日曜9時に日曜学校、10時半にサービス、11時45分にゴスペル・サービス(これは基地内の別の場所で行う)があり、午後6時に補足的なサービスがある。さらに月曜に聖書研究会がある。カトリックは毎日真昼にミサがある、ミサは金曜と土曜、そして日曜には3回ある。すなわち午前7時45分、9時、12時である。土曜は30分の間告解に当てられている。毎月洗礼を行っているが、これは第3週までの日曜日に限られている。

カトリックはプロテスタントと異なり、ミサを重視する。また、信者の絶対数は少ないが、参加者が多いため、日曜には3回行う。一度に100名から150名集まる。その間に、やはり同じ礼拝堂で、プロテスタントのサービスがある。

それ以外の宗教は同じ建物の中の小部屋を使う。ユダヤ教は第2週と第4週の金曜日にサバトがある。イスラームの集会は水曜午後5時からと金曜12時からである。ほかに、フィリピン系キリスト教、韓国系キリスト教の集会についても

記載されている。前者は日曜午後1時から、後者は金曜夕方である。さらに、日本人を対象とする聖書研究会、またモルモン教などの集会についてもスケジュールが記載されている。

週ごとの活動については、座間米陸軍基地の例を紹介しておく。プロテスタントについては、火曜と木曜の午前9時にプロテスタント女性たちの聖書研究、水曜日真昼に韓国人の聖書研究、水曜午後7時に賛美歌、木曜午後1時からアジア人のための聖書研究、そして土曜午後7時にはペンテコステ派のサービスがある。カトリックは毎日真昼に聖餐式、月曜午後7時に聖書研究、木曜には午後5時から祈りの会合、それに続いて賛美歌の練習などがある。これらに加え、月ごとに特別な催し物や会合がある。

定期的な礼拝に加えて、年に数回リトリート（黙想）という制度がある。これは1950年代に生まれた。リトリートはチャプレンのもと、祈りや瞑想、学習、教育のためにおこなう一時的な集団の隠遁を意味する。具体的には2泊3日の合宿形式で、用意されたプログラムに沿って共通テーマを討論して、理解を深める。そのプログラムはキリスト教の教えと密接に関係しているが、たんなる宗教的な教育というよりはもう少し一般的であるといえる。社会道徳、禁酒、反ドラッグ、ダイエット、国際結婚などのトピックが取りあげられている。東京や沖縄など複数の基地が近接する場所では、異なる基地から複数のチャプレンが参加して合同で行うこともある。費用は軍が持つ。

実際、チャプレンの活動でとくに大事なことはカウンセリングで、ほとんどのチャプレンが大学で心理学に属するカウンセリングの資格を取得していた。カウンセリングの話題の第一は、戦時や定期的な演習における夫婦の別離である。これは軍隊の状況を的確に反映しているといえよう。第二次世界大戦では「チャプレンに話せ」が合い言葉になっていた、というし、また1942年の調査では平均一日53件のカウンセリングをチャプレンがしていたという⁽⁸⁾。歴史的に見れば、チャプレンが本来の仕事に専念する環境は整ってきたが、現実はどうであろうか。あるチャプレンがいみじくも述べたように、かれらはGeneral Practitioner（専門にこだわらない一般開業医）なのである⁽⁹⁾。

海軍に属するあるチャプレンによると、チャプレンが行うカウンセリングは本来魂の救済に関わる助言を意味する。しかし、実際は軍隊を早く辞めたい、海に出たくないなど世俗的な事柄についての相談事が多い。そして、結婚前に

夫婦となるカップルがそろってチャプレンのカウンセリングを受けるという。チャプレンは、基地を歩き回り、できるだけ兵士たちの仕事場に顔を出すようにすること、つまり兵士たちの身近にいて相談しやすい存在になることが大事なのだ。

ある記録によると、第二次世界大戦での戦場での13週間で、13000人の部隊を担当していたチャプレンは、全部で1019回の平日のサービスをおこない、これに延べ55000人が参加したという。また日曜のサービスでは、1万人が参加した。これは一日に複数回行われたが、全部で29回行われ、延べ139000人が教会に来た。さらに19の礼拝堂を建てたという⁽¹⁰⁾。こうした儀礼活動だけでなく、近親に兵士の死や容態を伝えたり、また代筆などで、同じ時期に2000通の手紙を書いたりしている。

基地での生活は、戦時であっても規則的で平穏だが、戦場では違う。戦場では、たとえ戦闘要員ではなくても、死の危険にさらされる。いくつかチャプレンたちの手記から引用しておきたい。

空挺部隊では、前日に懺悔、告解を行う。兵士たちはひざまづいて祝福を受けた⁽¹¹⁾。

また、戦場では、死にゆく兵士のもとに駆けつけて儀礼を行う。

膝の上にかれの頭をのせ、赦祷式を施した。かれの血がわたしの制服に染み込んでいく。雨は降り続いていたが、それに気づかなかった。わたしはすべてを忘却していた。かれの頭を乗せたまま、数千年もそこに膝間づいていたように思われる。命はすでに去ったようだが、わたしはかれの額をやさしく撫でていた⁽¹²⁾。

最後の(塗油の)儀式は雨の中で、砲弾の炸裂する中で、溝などで、必要だとわかればどこでもおこなわれた⁽¹³⁾。

負傷した男の傍に寝て、わたしは告解を聞き、塗油をした⁽¹⁴⁾。

IV チャプレンの語り

さて、以下が本題となる。チャプレんたちは、みずからの言葉でどのように、戦争や軍隊について語っているのだろうか。以下、チャプレんが著した自伝を対象に論を進めていく。

ある匿名のチャプレんは、軍への入隊の動機をつぎのように語っている。かれはイタリア戦線に従軍した陸軍高射砲師団のチャプレんである。

かれは、真珠湾攻撃にショックを受けた。

そして、その数日間、ほかの人間と同じく、どうすればこの奇襲攻撃を罰し、人類に対する残忍な攻撃という癌のような病いを打ち倒すことができるのかと考えていた。聖職者で神学生であるためわたしは徴兵を免除されることを知っていた。最終的に、わたしはチャプレんとなって軍隊の活動に身をささげようという決意が生まれた⁽¹⁵⁾。

ここで、チャプレんとして戦争に参加することは、国家への奉仕と密接に結びついていることが分かる。しかし、真珠湾への奇襲攻撃を、日本（対アメリカ合衆国）との関係で捉えておらず、むしろ人類の敵として位置づけていることに注目したい。

入隊後、訓練を受け、軍隊の生活になれたチャプレんは、どのように自分の役割を認識しているのだろうか。あるチャプレんは、「宗教活動の拠点となる礼拝堂を厳しい生活を送る兵士のオアシスにしよう」⁽¹⁶⁾と述べている。ここには、特異な表現は認められない。しかし、チャプレん・ Sampson (F.L.Sampson) の次のような文章では、キリスト教のイディオムで軍隊や兵士が形容されることがよくわかる。Sampson は、陸軍空挺師団のカトリック・チャプレんで、第二次世界大戦のノルマンディーとオランダでの作戦に参加している。オランダで捕虜となり、終戦をドイツの捕虜収容所で迎える。その後朝鮮戦争にも従事している。

さて、あなたは陸軍から、そして兵士としておこなうべき多くの特別な義務から解放されつつある。しかし、その本当の意味で、軍の生活はカトリックに

とってなにも新しいことはない。洗礼を受けてイエス・キリストの軍隊に入隊したその日から、あなたは従軍していたのだ。洗礼を受けたとき、あなたは、教父母を通じてキリストとその教会の命令すべてに従うと誓ったのだ。そして、国内外のすべての敵からあなたの不滅の魂という聖域を保護、防御するという誓約を立てたのだ。…聖餐拝受と告解があなたを強くするだろう。そして、堅信礼があなたをしてキリストの戦う兵士とするだろう⁽¹⁷⁾。

過去12年間、わたしはけっしてその決定を後悔しなかった。わたしは陸軍が好きだ。というのもわたしはアメリカで教会のもっとも偉大な使徒となる機会を与えられているからである⁽¹⁸⁾。

ここで兵士は、キリスト教共同体の兵士として位置づけられている。洗礼をもって共同体のメンバーとなるのだが、この共同体は同時に軍隊と表現されている。この表現は、隠喩ともいえるが、宗教的視点から見れば、隠喩ではなく現実であろう。このように捉えることで、チャブレンは、いわば内側から軍隊と宗教という対立図式を克服しようとしている、といえないだろうか。キリスト教の共同体を軍隊と捉えることで、対立が解消され、みずからの境界的な位置が隠蔽される。これが現実からかけ離れたフィクションであるのは、米軍を構成する兵士がキリスト教徒だけでないことを思い起こせば十分であろう。

チャブレンが軍隊を語る際に、国家すなわちアメリカ合衆国への言及は明示されているとはいえない。以下の引用を見てみたい。

わたしは、地球上に自由、正義、平和を保障しようとする主張に関与してきたことを感じて、これほど嬉しいことはない。わたしの部下たちの心に火を灯し続ける手伝いをしていきたい。そうすることで、夜が耐えられないほど暗くなることを避けたいのだ⁽¹⁹⁾。

この文章は、北アフリカ戦線の装甲師団に従軍したカトリック・チャブレン、ドナヒュー (E.T. Donahue) のことばである。「地球上に自由、正義、平和を保障しようとする主張」というのはアメリカ合衆国の主張と理解することは、さほど困難ではない。しかし、具体的な名前は出てこないし、また戦争を国家間の

暴力的な対立とみる視点は避けられている。

軍隊が宗教的な軍隊として再定義されると、兵士たちからも本来不可避のはずの国家性が消えてしまう。兵士たちは、宗教的にも多様なはずであるにもかかわらず、均質な存在として理解されることになる。

兵士たちは、なにか逆説的な存在である。かれらの過ちや罪は明らかである。しかしながらかれらの美德もたくさんある。かれらはふんぞり返っていて高慢だが、かれらには深い謙虚さがあり、それは多くの仕方でチャプレンであるわたしに示された⁽²⁰⁾。

さて、つぎに注目したいのは、兵士たちが戦う敵についてである。軍隊がイエスの軍隊として位置づけられた帰結として、その敵は神の敵、悪そのものとして表現される。ちょうどチャプレンの属している軍隊が超国家的な軍隊であるのに対応するかのように、敵もまた超国家的な存在としてかれ・彼女とその兵士たちと対峙する。その結果、戦争が国家間の暴力的な対立であるという現実 は消滅し、またチャプレンの境界的な地位から生じる矛盾やジレンマも克服されることになる。

最初から、兵士は殺したり殺されたりする恐怖で震えていた。かれは生きようとしていたし、生かされていたかった。しかし、その希望は狂信的な敵によってなされた絶望的な状況によって飲み込まれていた。だから、かれは人類に創造者があたえた神意を拒否する悪の力を征服するために殺しあうという運命を担い続ける。自由な人間を奴隷にし、神意を剥奪しようとする残忍な力の意思を破壊しなければならない。そのためにも人類ののろい、すなわち戦争が続くのだ⁽²¹⁾。

第二次世界大戦では、こうした悪が具体的な形を取ったのがファシズムであり、それ以後は無神論である共産主義ということになる。とくに共産主義は神の世界を否定する悪であり、イエスの軍隊が闘い勝利すべき敵なのである。

そして、チャプレンたちの闘いは、兵士たちの鼓舞だけでなく、異教徒の改宗を具体的な戦いとして位置づける。たとえば、沖縄に上陸した海兵隊に従軍

していたチャプレン・ウィッカーシャム (G.W.Wickersham) は、日本への侵攻を伝道として海兵隊たちに説教している。

わたしたちは警官として赴くが、伝道師になるまではわたしたちの使命は完遂されない。…積極的な説教と教えという伝道が続く。それらは郷土での教会のプログラムに由来するが、同時にわたしたち (の規律と理想) に依拠している⁽²²⁾。

なお、ウィッカーシャムは、異教徒の日本に伝道をするのは理解できるが、なぜこの大戦に同じキリスト教徒のドイツが関与しているのか、という一兵士の問いかけに、ナチスに抗戦している国内の最大勢力はキリスト教会だと答えている。

つぎに朝鮮戦争に従軍した海軍のミュラー (J.H.Muller) 牧師による、より好戦的な記述を紹介したい。

キリストの十字架がまた勝利した。キリストは韓国の村ひとつを得たのだ！イエスが語った十字架の磁力が、男や女をいまでも異教の闇からかれの偉大な光へと導いているのである⁽²³⁾。

チャプレン・ミュラーの自伝から、改宗を決意した村むらで偶像破壊 idol breaking や護符焼却 char burning がなされていたことが分かる。また、朝鮮戦争においては捕虜収容所での北朝鮮兵ら共産主義者たちの改宗も盛んになされていた。

改宗したのは敵だけではない。一般に宗教に無関心であった米兵たちもまた、これまでの態度を悔い改め改宗し、洗礼を受けている⁽²⁴⁾。戦争という死と隣合っているような非日常的な状況において、みずからの死そして死後を考えざるを得なかったのだろうか。あるいはたんに心の安寧を求め宗教的にならざるをえなかったのだろうか。

市民生活においては、とくに平時で余裕のある時代には、人びとは快樂、趣

味、仕事、家族などに夢中になるため、宗教は後席に退く。しかし、戦闘時や捕虜収容所では違う。宗教が前に来るのである⁽²⁵⁾。

チャプレンはさまざまな対立において境界的である、と第2節で指摘した。いままで見てきたのは、国家と宗教、あるいは戦争と平和という対立を、チャプレン自身がどのような言葉で語り、一見矛盾に満ちた関わりを積極的に変貌させているのかを見てきた。

以下では、このような矛盾と密接に関係するチャプレンの男性性についてもすこしだけ触れておきたい。戦争と平和という対立は、前線で戦う男性と銃後を守る女性という対立に重なる。チャプレンは前線にいて、戦いを拒否する「女性的」存在ともいえる。以下のエピソードのように、男性チャプレンは戦闘地帯にあって、みずからの男性性を証明しなければならない。

Sampson の自伝には、塹壕に入り損ねてチャプレンの目の前で敵弾におびえ、恥をかいた兵士とのやりとりが紹介されている。かれは、チャプレンを見返そうと偵察に誘う。これは、チャプレンが偵察のような危険な行為に参加するはずはない、と見くびってなされた誘いなのである。しかし、Sampson はそのような想定を裏切り、「行かせてください」と胸を張って答える⁽²⁶⁾。

チャプレンが非戦闘員であるのは、武器を携帯しないという国際法に基づく。かれ・彼女は武器を持たないことで、戦争における自身の立場の特異性を主張している。それは、戦う味方の兵士から見れば、兵士であること、軍隊の一員であることの否定ともいえる。しかし、チャプレン側から見ると、武器非携帯という法こそチャプレンをチャプレンたらしめているのである。それは決して否定的な特徴として捉えられているとはいえない。このことがよく分かるのが、ベトナム戦争に従軍したチャプレン・アーヴェイ (A. Arvey) のことばである。ベトナム戦争では、危険だったため武器の携行を許されたが、そのインタビュー記録では、携帯するようという上官の指示にはげしく抵抗したという⁽²⁷⁾。

おわりに

本稿では、アメリカ合衆国のチャプレンの性格を、まず構造分析の視点から境界的・越境的存在ととらえた。それはまた、矛盾に満ちた存在であることを示唆している。このような矛盾は、チャプレン本人がどのように認識し、かつ

乗り越えようとしているのだろうか。ここでは、いくつかの自伝を分析し、キリスト教の信仰共同体を軍隊とみなし、敵を倫理的な悪とする態度を指摘した。これによって、国家と宗教、軍隊（暴力）と宗教（平和・愛）という対立が解消・隠蔽されているのではないかと筆者は指摘した。そこには、戦争においては当然強調されるべきナショナリズムや国家への言及は認められない。宗教的なイデオロムに徹することで、政治と宗教という対立から生じる矛盾が克服されているように思われる。

最後に、今後の課題をあげておきたい。ひとつは、言説の比較である。今回は自伝の語りを分析したが、その位置づけは、ほかの言説との関係で理解されるべきであろう。具体的に比較の対象は3つある。それらは、1) 兵士や政治家の言説との比較、2) キリスト教と他の宗教に属するチャプレンの言説との比較、3) 現代のチャプレン制度が確立したとされる第一次世界大戦や第二次世界大戦、朝鮮戦争と、チャプレンが疑問視されたベトナム戦争の比較である。

もうひとつは、アメリカの宗教を理解するうえで無視できない「市民宗教 civil religion」概念との関係である。市民宗教はどちらかというと政治的な言説を分析対象として議論されてきたように思われるが、チャプレンの言説分析を通じて、逆説的ではあるが市民宗教から一番遠く離れているところに位置するかに見える聖職者に注目することで再考する余地があるように思われる。

最後に、冒頭で触れたように、日本の状況を考慮しつつ、チャプレン制度についてより実用的な視点からの考察も必要と思われる。以上を今後の課題として本稿を終えたい。

註

- (1) 傘木澄男「チャプレン」新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典Ⅲ』(研究社、2002年) 1043-1044頁。
- (2) 本節は田中雅一「軍隊と宗教——米軍におけるチャプレン」田中編『人文学報』(特集 アジアの軍隊の歴史・人類学的研究) 第90号(2004年4月) 153-168頁に基づいている。ほかに、初期の歴史については、William E. Dickens, Jr., *Answering the Call: The Story of the U.S. Military Chaplaincy from the Revolution through the Civil War* (N.P.: Dissertation.com, 1999) を、全般については Dale R. Herspring, *Soldiers, Commissars, and Chaplains: Civil-Military Relations since Cromwell* (Lanham: Rowman and Littlefield, 2001), pp. 17-52 を参照。
- (3) これはもちろんキリスト教のチャプレンで、ユダヤ教の場合はモーゼの十戒と

ダビデの星をあしらったもの、イスラームの場合は三日月である。

- (4) チャプレンの境界的・越境的性格については田中「軍隊と宗教」153-168頁が詳しい。そこで、筆者は構造的な視点から矛盾を明らかにすると同時に、一見国家間の対立を超越しているかに見えるチャプレンもまた、国家（軍隊）の一員として敵と対峙せざるをえないと指摘した。また、本稿と異なり、チャプレンを戦闘地帯で求める兵士の視点に立てば、チャプレンの国家への関与を批判することは不十分であるとして、つぎのように指摘した。「兵士とともにいるかぎり、チャプレンもまたみずからの命を危険にさらしているのであり、そこに強い連帯が兵士との間に生まれてもおかしくはない。チャプレンを「戦争屋」と批判できるのは、戦場から遠く離れたところにおいて、兵士をとりまく現実から目をそらそうとする私たちだけではないだろうか。」田中「軍隊と宗教」165頁。なお、チャプレンの研究書のほとんどが、国家と宗教（教会）の関係を主題として取り上げている。これらについてはClarence L. Abercrombie, III, *The Military Chaplain* (London: Sage, 1977); Doris L. Bergen, "Introduction," in Doris L. Bergen ed., *The Sword of the Lord: Military Chaplains from the First to the Twenty-First Century* (Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 2004); Israel Drazin and Cecil B. Currey, *For God and Country: The History of a Constitutional Challenges to the Army Chaplaincy* (Hoboken N.J.: KTAV, 1995) を、また英軍ではMichael Snape, *God and the British Soldier: Religion and the British Army in the First and Second Wars* (London: Routledge, 2005); Michael Snape, *The Redcoat and Religion: The Forgotten History of the British Soldier from the Age of Marlborough to the Eve of the First World War* (London: Routledge, 2005) を参照。
- (5) 有名な例として大半が仏教徒の日系米兵からなる第百大隊のキリスト教チャプレンの記録がある (Israel A.S. Yost, *Combat Chaplain: The Personal Story of the World War II Chaplain of the Japanese American 100th Battalion* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2006))。
- (6) 観察記録に基づくチャプレンの活動については田中「軍隊と宗教」が詳しい。ほかに、I. Drazin and C. B. Currey, *For God and Country*, pp. 25-44を参照。本稿では分析の対象とはしなかったが、それ以外に、『フィールド・マニュアル』のチャプレンについての記述 (FM 16) が、軍隊でのチャプレンの活動や位置づけを知るうえで重要である。*The Navy Chaplain* (Prepared by Bureau of Naval Personnel), (Washington D.C., 1949)、大戦間のものとして *The Chaplain: His Place and Duties (Training Manual United States Army)*. (U.S.A. War Office, 1926) なども参照。
- (7) カウンセリングについてはThe Chaplain School of the United States of America, *The Chaplain as Personal Counselor* (Carlisle Pa.: The Chaplain School, 1947) に詳しい。
- (8) 別の記録では1944年に118,450件のカウンセリングをひとりのチャプレンが行ったという Rochard G. Hutchenson Jr., *The Churches and the Chaplaincy* (Atlanta: John Knox Press, 1975), p. 75.
- (9) Albert Fowler, *Peacetime Padres: Canadian Protestant Military Chaplains 1945-1955* (St. Catharines, Ontario: Vanwell Publishing Ltd, 1996), p. 184にも類似の表現がでてる。

- (10) Christopher Cross, *Soldiers of God: True Story of the U.S. Army Chaplains* (New York: E.P. Dutton & Company, 1945), pp. 119-120.
- (11) Francis L. Sampson, *Look out below! A Story of the Airborne by a Paratrooper Padre* (Washington D.C.: The Catholic University of America Press, 1958), p. 85.
- (12) Padre, *They Told it to the Chaplain* (New York: Vintage Press, 1953), p. 93.
- (13) Ibid., p. 105. 朝鮮戦争についての類似の記録として、Benjamin F. Mortensen, *The Diary of a Frontline Chaplain* (N.P., 1997), p. 6 がある。
- (14) F. L. Sampson, *Look out below! A Story of the Airborne by a Paratrooper Padre*, p. 106.
- (15) Padre, *They Told it to the Chaplain*, p. 4.
- (16) Ibid., p. 12.
- (17) F. L. Sampson, *Look out below!*, p. 171.
- (18) Ibid., p. 177.
- (19) C. Cross, *Soldiers of God: True Story of the U.S. Army Chaplains*, p. 84.
- (20) F. L. Sampson, *Look out below! A Story of the Airborne by a Paratrooper Padre*, p. 171.
- (21) Padre, *They Told it to the Chaplain*, p. 124.
- (22) George W. Wickersham, II, *Marine Chaplain 1943-1946* (Bennington VT: Merriam Press, 1998), p. 112.
- (23) John H. Muller, *Wearing the Cross in Korea: A Marine Chaplain's Experience, while Wearing the Cross, Insignia of the Chaplain's Corps in War-torn Korea* (Personal Publication, 1954), p. 53.
- (24) イラク戦争での洗礼については、Lance Kittleson, *Meditations from Iraq: A Chaplains Ministry in the Middle East 2003-2004* (Lima, Ohio: CSS Publishing Company, 2005), pp. 15-17 を参照。
- (25) *Francis L. Sampson Papers Interview Transcriptions, 1974, tape#4 #1 side p. 20*, (U.S. Army Military History Institute). しかし、一方でうまく当たるようにM-1ライフル銃に祝福してほしい、という兵士の願いを拒否するチャプレンもいる (B.F. Mortensen, *The Diary*, p. 17)。
- (26) F. L. Sampson, *Look out below!*, p. 74.
- (27) Al Arvay へのインタビュー記録 (U.S. Army Military History Institute Senior Officer Oral History Program) から。